

※29.

安静時労作性狭心症におけるT波異常
—空間速度心電図を用いた検討—

(内科学第2) ○佐々木暁彦、伊吹山千晴

【背景及び目的】標準12誘導心電図(ECG)-T波の正常波形は左右非対称である。しかし、ECGではT波の左右対称性の定量は困難である。その為、従来正常と診断されたECGの中に“対称性T波”という異常所見が含まれている可能性がある。今回の目的は安静時ECGは正常と診断された労作性狭心症を空間速度心電図(SVECG)を用い安静時診断が可能か否か検討することである。

【対象及び方法】対象は冠動脈造影にて75%以上の狭窄が認められた労作性狭心症50例(AP群)及び年齢、性別を対応させた正常健人30例(N群)。全例にSVECGを施行した。SVECG-T波は全例2峰性であり、第1峰を“a波”、第2峰を“c波”とし、以下の項目について両群間で比較検討した。①a波高、c波高。②c波高/a波高比(c/a比)。③SVECG-QRS波の開始からT波の開始及び終了までの持続時間を心拍数で補正した、Q0c、QTc。

【結果】①a波高は両群間に有意差を認めなかったが、c波高はAP群はN群に比し有意に低値であった($p<0.05$)。②c/a比はAP群はN群に比し有意に低値であった($p<0.0001$)。③Q0cはAP群はN群に比し有意に延長していた($p<0.0001$)が、QTcは両群間に有意差を認めなかった。④c/a比 <1.7 をAPとしretrospectiveに診断率を算出するとsensitivity 82%、specificity 70%、accuracy 78%であった。

【総括】SVECGは一次微分波形なのでa波及びc波はECG-T波の上行脚及び下行脚の最大傾斜にそれぞれ相当する。そのためc/a比によりECG-T波の左右対称性の定量化が可能である。本研究の結果、安静時ECGは正常と診断された労作性狭心症においてECG-T波は正常人に比し左右対称化しており、SVECG-T波におけるc/a比は安静時に労作性狭心症を診断するのに有用な指標であった。

30.

Intracoronary ECGによる心筋viabilityの評価
—^{99m}Tc-pyp&¹⁰²Tl dual SPECTを用いて—

(八王子 循環器内科) ○田村忍

内山隆史 田村憲 中野渡雄一 並木紀世
小林裕 笠井龍太郎 白井幹雄 豊田徹
吉崎彰 永井義一

(内科学第二) 伊吹山千晴

【目的】再灌流が得られた急性心筋梗塞患者の心筋viabilityの評価にPTCA施行中の冠動脈内心電図(以下i.c-ECG)が有用か否かを検討した。

【対象】対象は冠動脈内血栓溶解療法にてTIMI 3に再灌流が得られ高度残存狭窄を残した1枝病変患者32例。

【方法】発症約1カ月後に高度残存狭窄に対するPTCA施行中にi.c-ECGを記録した。急性期のdual SPECT上viability(+)群[以下(+)群]20例、viability(-)群[以下(-)群]12例に分けi.c-ECGの変化、慢性期EFの変化を比較検討した。

【結果】i) 両群間に年齢、性別、病変部位に有意差を認めなかった。ii) (+)群のi.c-ECGは全例ST上昇を認めた。(-)群のi.c-ECGでは12例中9例でST上昇を認めた。iii) (-)群でi.c-ECG上ST上昇した例では慢性期EFの改善を認めた。

【結語】i.c-ECG上ST上昇した例では慢性期EFの改善が認められ、i.c-ECGが心筋viabilityの評価に有用である可能性が示唆された。